# リメンバー新聞

53号
2012年2月22日

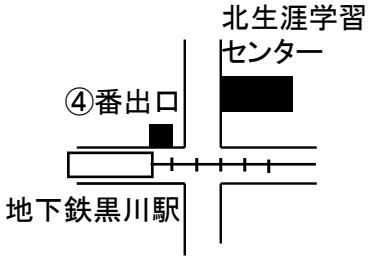
編集・発行
リメンバー名古屋自死遺族の会
http://will.obi.ne.jp/remember/
remember_nagoya@yahoo.co.jp
FAX:020-4668-8925
郵便:〒458-8799
名古屋市緑郵便局留め
リメンバー名古屋

## リメンバーin岡崎終了

一月二十二日
岡崎げんき館

## 次回の遺族会

第50回
2月26日(日)13:15から
名古屋北生涯学習センター
地下鉄名城線「黒川」下車
(4番出口)よりすぐ
参加費:500円




その次は・・・
第51回
4月15日(日) 北生涯学習センター

2012年1月22日、愛知県岡崎市「岡崎げんき館」において、昨年に引き続き「リメンバーin岡崎」を開催しました。

### 午前:セミナー「死なれるということ」

午前は哲学者の鷲田清一さんにお越しいただき、「死なれるということ」と題して、ご講演いただきました。50名程の方にご参加いただき、有意義な時間になりました。

哲学は、「あたりまえ、漠然と思っていることを再考するもの」であるとして、残された者の側から、自死、死なれるという経験をどう再考していくのかについて、お話いただきました。死なれるということを喪失だけではなく、「死者の誕生」へと転換し、「死者を育てる」ことができるのではないかとおっしゃったのは印象的でした。

哲学というと、「難しいもの」という印象をお持ちの方が多く、あまり親しみのない分野でのセミナーを行うことには、不安がありました。時間が経つなどして、自身の苦しみ、悲しみを少し客観的にとらえようとされている方には、今回のセミナーは、その考えを補うものになった部分があるのではないかと思います。しかし、まだ遠い難しい話であるばかりでなく、さまざまな捉え方、学問的言葉遣いなどに、つらい思いをされた方もおられるのではないかと、懸念は残りました。

### 午後:分かち合いの会

午後は、いつもの遺族会と同じ、分かち合いを行いました。

一日参加された方も多くおられ、本当にお疲れになったのではないかと思います。

また、今後も機会があれば、セミナー、分かち合いなどを行いたいと思います。

みなさまお疲れさまでした。そして、ご協力いただきましたみなさま、ありがとうございました。

連載「わかちあいって何だろう？」は、今回はお休みです。
※インタビュー（メールで行います）にお答えいただける方を募集しています。

## 投稿

雪の花

雪の吉野の　道なき道を踏み分けて
山深く消えて行ったあなたに　会いたい
足跡を辿って追いかけてゆきたい　今すぐに

あなたが入っていった吉野の山を
涙をこらえて　見ています
この山のどこかに
まだあなたがいると思うから
けれど　あなたの後ろ姿も足跡も
もう　とうに見えなくなってしまって
私の目に写るのは
どこまでも降り続く　白く冷たい雪だけ

あなたが生きているのか
死んでしまったのかも　わからないけれど
あなたの人生は　きっと
終わってしまったのですね
花と散ったあなた
尾根から吹き下りる風に　散りしきる雪は
ほんとうに冷たいです
せめてこの舞い散る白雪が　花びらだったら
あるいは
あなたが雪に成り変わり
私に向かって降ってきてくれたのなら
まだ少しは　慰められたかもしれないのに

あなたは　もう帰ってこない　なのに
私だけ生きていなければならないなんて
人生は　まったく違ってしまった
昨日までは　美しい花のある優雅な世界
今は　冷たい鉛の空と吹雪の中に立ちすくむ
こんなふうに人を追いやり　人生を奪う
雪よりも非情な　人間の心

ねえ　人の心は
そういうものなのですか
ならば　私も祈る
雪よ　降り続けておくれ
積もった雪を踏み分けて
この山の中に入って行かれた
私のあの人の足跡を消し
追手が道に迷うほどに
どうか　生きていて　あなた
どうか　どうか　吉野の　雪の花びらよ

吉野で義経と別れた後の静御前の思いをうたった歌「雪の花」（作詞…青木清高　作曲：菊仲米秋　作曲：大正三年）の現代語アレンジです。

〈原詩〉
吉野山　峯の白雪ふみわけて　入りにし人のあとぞ恋しき　花とは散れど花ならむ　この白雪の花ならば　なぐさむ方もあらましを　しほりもたえて峯ふもと　あをねおろしに　散りしきる　雪の花こそつれなけれ　いなつれなきは人心　昨日は花の影に立ち　今日は雪とぞ降りかはる　よしさらば　よしさらば　ふみわけたまいしわが君の　みあとうづみておう人のみちまどうまで散りつもれ　やよみ吉野の雪の花びら

『仏教タイムス』紙上の当会スタッフの連載「喪失と音楽」からの抜粋です。

## 遺族相談のご案内

面接による自死遺族相談（無料）があります。よろしければ、ご利用ください。

**〇愛知県精神保健福祉センター**
（愛知県内で名古屋市以外にお住まいの方）
要予約 052-962-5377
毎月第3木曜日　午後2時-3時30分

**〇名古屋市精神保健福祉センターここらぼ**
（名古屋市内にお住まいの方）
要予約 052-483-2095
毎月第3火曜日　午前10時-12時

# 春の遠足・4月22日(日)

毎年春・秋に行っています遠足も14回目となりました。今回は、4月22日(日)に行うことになりました。

4月15日が遺族会(分かち合い)の日ですので、その翌週です。遺族会の後、ゴールデンウィークの前ということで、この日になりました。今は暖かさというものが想像できなくなっていますが、もうきっと暖かい頃だと思います。

まだ、行先は決まっていませんので、ご希望、推薦などありましたら、ぜひぜひお知らせください。

遠足は、日ごろのつらさを忘れて楽しもうということではなく、同じ経験の中で集まった者同士、ぜひより深く知り合いになっていただき、お互い支え合える関係を築くきっかけになってほしいとの思いからやっております。

お時間のある方、よろしければご参加ください。
詳細は、次号のリメンバー新聞、遺族会、ホームページ等でお知らせいたします。

# 親の会・終了しました。

2月4日「親の会」の集い「温泉に入ってゆっくり過ごす会」が行われました。

「親の会」は、リメンバー名古屋に来られた方の中で、お子様を亡くされた方だけの集まりです。不定期ですが、集まって話す場を設けています。

次回の予定が決まりましたら、遺族会、リメンバー新聞、ホームページ等でお知らせします。

# ご寄付いただきました。

多くの方にご寄付をいただきました。会計報告の時にまとめてご報告させていただきます。

本当にありがとうございます。大切に使わせていただきます。

# 次回「ディアレスト」のご案内

## 家族以外の大切な人を自死で亡くした人の集い

家族ではないけれども大切な人を自死で亡くされた方を対象に、２ヶ月に１回「ディアレスト（Dearest）」が開催されています。

次回は
**日時**: ３月２５日（日）13:30-16:00
**対象**:家族以外の大切な人（恋人・婚約者・パートナー・親友・同僚・上司・部下・先輩・後輩・先生・生徒、など）を自死（自殺）で亡くされた方
**参加費**:５００円
**場所**:名古屋市中村生涯学習センター２F
- 第三集会室

**連絡先**:the.dearest1@gmail.com
- http://dearest.heya.jp

# 祈りの集い-自死者供養の会-（曹洞宗）

もう、締切は過ぎてしまっていますが、下記のように行われますのでお知らせいたします。

日時:平成24年2月25日(土)　14:00～15:30
会場:東京グランドホテル5階(東京都港区芝2-5-2)
対象:自死者遺族、または知人を自死で亡くした方。
(宗教・宗派は不問ですが、供養は曹洞宗の方法で行います)
会費:無料
主催:曹洞宗総合研究センター 「祈りの集い」実行委員会
TEL:03-3454-7170　fax:03-3454-7171
Eメール:inori@sotozen.jp
申し込み 電話、郵送、fax、メールにて住所・氏名・電話番号をお知らせ下さい
定員:30名
※2月17日(金)までにお申込ください。

## 新聞郵送をご希望の方へ

1月～6月末までのお申し込み(前期)…1000円　もしくは　80円切手13枚
7月～12月末までのお申し込み(後期)…500円　もしくは　80円切手7枚
お申込みは、郵便番号・住所・氏名を記入の上ご送金いただくか、切手をご郵送ください。遺族会の当日、受付でお支払いいただいても結構です。

## 新聞のバックナンバー

新聞の過去発行号は、会のホームページよりご覧いただけます。(PDF形式)

## スタッフ募集

遺族会に参加したことがある方で、会の活動のお手伝いをいただける方募集しています。
遺族会当日に、お茶の買い出し、参加者の案内など、継続的でなくても結構です。
詳しくはお問い合わせください。

# リメンバー文庫

リメンバー文庫では、遺族の方向けの書籍を集め、遺族会の時などに貸し出しを行っています。今回は、文庫の中から「「聴く」ことの力」(鷲田清一著)を紹介させていただきます。

今回皆様に紹介する本は「リメンバーin岡崎」で基調講演をなさった、鷲田清一氏の『「聴く」ことの力』です。

本書の冒頭、阪神・淡路大震災で愛息を亡くしたある女性が、炊き出しボランティアの方に自責の念を語り続けたというエピソードがあります。そのボランティアの方は、愛息を亡くした女性の話を聴くことしかできなかったといいます。ですが結果として、その女性の爛れた心の薄膜はかろうじて一枚になり、心を被うことができたのです。私は、ここで鷲田先生は「聴く」ことの力・語ることの意味を示されていると解釈しました。

鷲田先生はリメンバーin岡崎で「語り合うことの可能性」を論じられました。私は、もしかしたら上記のエピソードは自助グループができる相互作用の象徴なのかもしれないと思いながら、頁をめくっていきました。本書は遺族のために書かれている本というわけではないと思います。なぜなら「臨床哲学試論」であり、哲学書に分類されているからです。それにも関わらず、遺族の心のひだに沿うような文章がそこかしこに存在するのです。遺されたものと逝ったもの、すべてが「哲学」という命題に足を踏み入れてしまったのかもしれないと思わされる内容の本でした。

鷲田先生の試論である「臨床哲学」は、先生の言葉を借りれば『人々の「苦しみの場所」に立とうとするものであるが、しかし治療の学であろうとするものではない。「苦しみ」のなかにいるひとが「治療」を必要とする患者であるのかどうか、それすら自明ではないような地点から、その人とともにその思考と対話を始めようとするもの』です。私はこの定義に、自死という深い傷を伴う別れ方をしたもの同士が互いに集い、語らい、聴く、という自助グループの構造が非常に類似していると感じました。「自分の言葉を聴きとってもらえる経験が、受苦者にとってはとても大きな力になる」と、鷲田先生は続けます。私は大きく頷きました。私がリメンバー名古屋に求めたものもまた、亡き人の人生の物語を聴いてほしい、そして忘れられた私の話を聴いてほしい、ということだったからです。

そして私は「聴いて」もらうことで、死なないでいる力をもらったと実感しています。鷲田先生は本書で『苦しみの「語り」というのは、語る人の行為でもあるとともに「聴く」人の行為でもある』と定義されています。まさにその通りだと、私は自分の経験を照らし合わせながら、先生の言葉を反芻しました。深い哀しみのさなかにありながら、なにかすべてを削ぎ落とした後の面持ちで迎え入れてくれたリメンバー名古屋の仲間とのホスピタブルな関係が、今の私を支えていてくれると感じているからです。

最後に本書を通じて私が感じたことは、鷲田先生が京都から阪神・淡路大震災の被災地へ、避難所へ何度も足を運び、そこで見た数々の喪失と友愛が、根底にあることでした。そしてもし、鷲田先生が順風満帆で何も失ったことがなく、周りにもそういう人がいなかったら、こんなにも暖かい言葉を紡ぐことはなかったのではないかと思いました。私たちもまた、先生のように暖かな言葉を紡げる日がいつか来る。そう信じられる本でした。(A. S)

## ★★★本の紹介★★★

「聴く」ことの力―臨床哲学試論 鷲田 清一（著）
株式会社阪急コミュニケーションズ 2,100円

## りめんばー

2月。もう体に暖かさが残っていなくて、できれば足早に通り過ぎてしまいたい、寒くて短い月です。

そんな２月には、簡単には通り過ぎさせてはくれない、死んだ妻の誕生日があります。

誕生日に少しの花を飾りながら、「誕生日おめでとう……」と言いかけてやめました。誕生日は本当に「おめでとう」なのか、ふと疑問に思い始めたのでした。苦しいことも多かった人生だったのですから。

自分自身のことを考えてみた時、誕生日はもう嬉しいものではなくなっています。「おめでとう」と言われると、「別にめでたくもないし」と、ひねくれたことを思ったりします。「おめでとう」という言葉は、当人の喜びを他人が祝福するときに言う言葉だという感覚があるのでしょう。当人が嬉しいと思っていない時に「おめでとう」という言葉を向けられても、素直に受け入れることはできないのだと思います。

「新年あけましておめでとうございます」と、つい先日までそんな言葉が交わされていました。これも素直に聞けない言葉ではありますが―「おめでとう」は決して当人の喜びを他人が祝うことだけではなく、共に何かを祝うことでもあるのでしょう。

その人の誕生を、その人の存在を肯定し、共に祝う「おめでとう」が誕生日にはあるのではないかと思います。

だからこそ―死んだ者のことを思うと心痛みます。決して生きることが幸せで満たされていた訳ではなかった者の、その存在そのものを、もっと何度も何度も祝ってあげればよかったと思うのです。

でも、「ごめんなさい」は命日の時にしようと思います。誕生日だけは、その存在に感謝し、よく頑張って生きたことを祝う日にしようと思います。

耳がつんとなる程の静けさに、ふと窓の外を見ると、一面の雪です。静かな２月の夜、寒さのおかげで花はまだ美しいまま咲いていてくれます。少し日が過ぎてしまいましたが、まだ「おめでとう」の言葉は間に合いそうな気がします。(KN)